
フィリピン・セブにおける語学学校の現状と展望

——グローバル・コミュニケーションの視点から——

森泉 哲

Abstract

The number of Japanese students studying English skills in English language schools in the Philippines, particularly in Cebu, has been growing. This article first delineates the reasons why going to Cebu to learn English has been advantageous in comparison to studying English in Western countries in light of the quality of English education and cost effectiveness. Second, the history of the English language learning industry is examined. Korean-owned language schools started being established at the beginning of the 21st century in response to the need to learn English to cope with rapid globalization and, following this trend, a decade later, Japanese-owned schools began to be founded. The final section of this article discusses current problems and the future prospects of global communication from a social justice perspective. In order to continue today's popularity of language learning in Cebu as well as in the Philippines and to enhance equal and sound relationships between the Japanese and the Filipinos, alternative discourses of the advantages of learning English in the Philippines are suggested.

1. はじめに

近年、大学生を中心としていわゆる「フィリピン留学」する人々が増加している。フィリピン留学とは、1週間から数か月フィリピンに滞在しながら語学学校に通い、英語能力を向上する目的で行われる短期滞在のことを指しているようである。一般社団法人海外留学協議会の統計調査によると、

2018年では、日本人学生の留学先として、アメリカ、オーストラリア、カナダ、イギリスに続き、フィリピンは5位であり、全体の8.6%にあたる約6700人が留学した。この数字は、2016年の調査では、ニュージーランドに続く6位であり、全体の6.7%であったことから、フィリピンへの留学に対する人気上昇していることを端的に示している（一般社団法人海外留学協議会, 2018）。この傾向は、2010年以降強まり、日本人のフィリピン留学、特にセブ島への留学は一時的なブームとしてではなく、英語留学はセブへという流れを確固たるものになっているように思う。しかし、いまだ市井の人にとっても、英語教育の研究者・専門家にとっても、なぜフィリピンへの留学なのか、それがなぜセブであるのか、という理由や利点、特に英米豪などの英語を母語（English as a native language）とする国々との比較からの利点についてまだ十分整理されていない。さらになぜセブの語学学校が発展してきたのかという歴史的経緯などについては、まだ理解が十分ではない。これは、単に大学のような教育・研究機関ではなく、フィリピンの語学学校は英語教育産業という異なったセクターであるということも関係がありそうだが、英語学習者である大学生をターゲットにしているという点では、軌を一にしており、両者の関係を見無視してはならない。とりわけ、英語教育ビジネスとして、代理店や語学学校が各種メディアを通じて学生獲得のために様々な宣伝を行っているが、研究者の視点、特にコミュニケーション学の視点からフィリピン、セブ留学の特徴や利点・課題などについてまだ十分に整理されているとは言えない。

そこで本稿では、フィリピン留学のうち、比較的情報がそろっているセブ留学を中心にその特徴について、さらにグローバル・コミュニケーションという視点からの問題点と可能性について整理を試みたい。最初に、なぜセブ留学が人気となっているのか、その理由について整理する。次に、セブの語学産業の歴史を振り返るとともに、現在セブで行われている英語教育についての課題と今後の展望をグローバル・コミュニケーションの視点から考察する。

2. なぜセブ留学なのか？ 欧米留学と比較した際の利点

フィリピン留学の行き先としては、セブ以外にも複数の都市を挙げることができる。また語学学校ではなく、正規留学として大学に留学する学生も多い。しかし、多くの日本人英語学習者の行き先としては、フィリピン中部ヴィサヤ諸島の一つの島で、かつてはフィリピンの首都であり、現在は人口が第2の都市圏であるセブである。なぜ、フィリピンへの語学留学数が格段に伸びているのかについては、観光、経済、文化などの観点から複合的な利点が挙げられよう。例えば、セブに限らずフィリピンの語学学校の情報サイト「フィリピン留学体験談ラジオ」を運営している中谷（2016, pp. 20-26）によれば、フィリピン留学の6つのメリットは以下の通りである。(1)マンツーマン・レッスンが主流であること、(2)講師も英語学習者という経験、(3)フィリピン人の国民性、(4)英語学習だけに専念できる環境、(5)日本からの距離の近さ、(6)格安な費用、ということだ。とりわけ、フィリピン政府観光省から委託を受けて調査を実施したJTBの結果（2011）によると、渡航先に選んだ理由として、マンツーマン授業が多いこと、費用が安価であることが8割以上を占め、日本から近距離であるということが3割示されており、これが3大理由になっているようである。

以上のような利点を筆者の視点でまとめると、(1)費用対効果、(2)英語教育の質という2点になると考えられる。まず大きな理由として、費用対効果（cost effectiveness）がある。費用対効果という言い方は、決して語学学校の費用が安いという側面だけを強調していない点は要注意である。費用と様々な住環境、教育カリキュラム、教師の質などを総合的に判断した際、費用と教育の質を欧米と比較しても、むしろセブ留学の方が優位性があるのではないかということである。

日本人学習者からは、フィリピン留学の大きな理由として、物価が安価であることが指摘され、また語学学校や留学エージェントでも経済的であるこ

とが喧伝されている。しかし、筆者の考えとしてはそのような側面があるのは事実であるが、経済的視点のみで語学研修の質を語るとは、文化の上下関係を否定し、平等で公正な社会を目指そうとするグローバル・コミュニケーションの視点 (Sorrells, 2013) とは相いれない考え方である。ことさら経済的な安価さを強調することは、直接的な表現として使用しなくとも、フィリピンの教師を安価な労働力とみなし、自己の英語能力向上のための単なる道具として利用していることを暗に含意し、教育の様々な価値を経済的尺度のみで判断していることを含意しているように感じられてしまう。

さて、費用対効果の「効果」としては、英語教育の達成度の観点には、主に主観的・心理的側面と英語コミュニケーション能力の伸長という2側面があると指摘されているが (Davies & Pearse, 2000)、この2点から考える効果も高いことが指摘されている。まず主観的・心理的側面であるが、留学の満足度は96%にのぼり、また留学に來たいと考えている学生が69%であったと指摘されているように (フィリピン政府観光省, 2011)、留学に対する主観的満足度は高いと判断できる。ここには英語学習に対する動機づけが高まったとする効果も含まれよう。

この主観的満足感の高さにつながる要因には様々あると考えられる。もちろんマンツーマン授業という授業形態が最も大きな効果であろう。その他の特徴として、英語教育の学習環境とともに滞在生活を満足させる衣食住環境が良好であることも挙げられる。例えば、英語学習に集中したければ、各語学学校で自習室や自習スペースが用意されているほか、滞在は基本的に語学学校が用意したホテル・寮であるので、勉強に集中できる環境にある。一方、適度に勉強と余暇のバランスを楽しみたいというニーズの学生にとっても、観光地としてのビーチもセブ市内からは比較的近く、日帰りで南国気分を味わうことができ、また買い物という点でも大型ショッピングモールが存在するので、買い物や観光という点でも十分満足できる要因がある。さらに、英語学習とともに、フィリピンの経済格差や貧困問題などの社会問題に興味あ

る学生にとっても、週末を利用したボランティア活動は語学学校で参加の募集・告知がされている他、実際に市内を移動している時にも、ストリートチルドレンが物乞いにくるなど貧困問題や経済格差を直接目の当たりにし、フィリピンの社会を実感できる。日本での経済的な豊かさを当たり前享受到している学生にとっては、興味がなくとも貧困・経済格差の問題に街を歩けば遭遇することになり、自己との生活の違いから、自己の生き方を考えるきっかけにもなっているようである。このように、費用と比較すれば、英語能力の伸長はもちろんのこと、文化的知識、社会問題への関心、観光としてのニーズなど様々な欲求を満たしてくれるとともに、日本での慣れ親しんだ生活を再考する機会となり、多様な学習効果が期待できる。

第2の大きな理由として、語学学校のフィリピン人講師による英語教育の効果がある。これは、しばしば指摘されているマンツーマン授業のほか、フィリピン人教師の日本人学習者に適した指導法や学習環境づくりである。先に示したフィリピン政府観光省による調査でも、留学中に最も何が良かったのかという質問に、マンツーマン授業を挙げた回答者が75%に達しており、フィリピン留学の最大の特長としても良いだろう。マンツーマン授業の効果として、特にオーラル・コミュニケーションに対する自信と会話の流暢さが増すことが指摘される。福屋（2015, p. 43）によると、欧米ではグループ授業が中心であり、この形態では英語に自信のある参加者が発言をしてしまう傾向にあるが、マンツーマン・レッスンでは、講師が参加者のレベルに合わせて会話の内容を変更してくれるので、この形態は、言語習得を促進する効果が期待できるという。

上記の利点のほか、英語学習時間もフィリピン留学の方が欧米への語学留学と比較して長いことも利点の一つである。欧米では、1日の授業時間が4時間程度であるのに対して、フィリピンでは1日の学習時間は10時間近くにも達するということが挙げられている（福屋, 2015, p. 39）。語学学校によってそのシステムはまちまちであり、早朝からクラスがあったり、夕食後もク

ラスがあったりするプログラムもあるなど、一概には言えないが、欧米の語学留学と比較すると、そもそも、研修時間の長さという量的な優位性も存在する。

英語教育の質については、学習者のレベルやニーズなど多様であるので、一概に何をもってして英語教育の質が高いと判断するかについては慎重にならざるを得ない。しかし、学習者のレベル・関心に応じて、多様なコースが用意されているプログラムが良いとすれば、フィリピンの語学学校は、総合的な英語能力を伸長できる総合コースや、ビジネスパーソン・社会人向けの Business English, TOEIC, 欧米留学希望者向けの IELTS, TOEFL コースなどが開講されている語学学校が多く、多様な学習者のニーズにも応えてくれている。また、幅広い年齢に対応するために、子供向けのクラスや中学生・高校生の英語キャンプなどが行われるなど、学習者のニーズに応えるだけの様々なプログラムが用意されており、学習者が選択できるだけの語学学校やコースが存在している。

このほか、セブ留学の利点としては、日本人が快適に過ごしやすい環境を整えている学校が多いことが挙げられよう。これを利点とするのかは議論があり、筆者もこれを利点とするのはやや躊躇してしまう。というのは、海外留学の目的には、自己にとっての快・不快に関わらず、現地の習慣や文化・社会を経験することによって、自己を内省したり、新たな価値観に気づいたりする異文化学習の視点が重要であるからだ。それを外国に渡航してまで、日本的な基準にあてはめて現地の施設・習慣について批評するのは、自文化中心主義を単に助長しているに過ぎないという危惧がある。一方で、より安心して快適に過ごせるように日本人向けの食事の提供や衛生面への配慮をしている学校もあり、また病気になった時の日本語スタッフがいる病院も存在し、日本人学習者は安心して過ごすことができるというのは利点と捉えることもできる。

セブ留学の利点を総括すると、費用対効果との視点から欧米諸国の留学と

比較して優位性があり、マンツーマン授業を主軸として構成される英語教育によって、日本人学習者は英語学習に集中できるとともに、授業外では学習者の興味・関心に応じた経験ができるという利点がある。これらの要因がフィリピン留学とりわけセブへの留学の人気に影響を与えていると考えられる。

3. セブ語学学校の歴史的経緯と日韓経営者による語学学校の特徴の異同

セブの語学学校は、主に韓国人と日本人が経営していると言われている。特に今世紀になって韓国資本による語学学校が設立され、その10年後日本人経営者による語学学校が設立されたという。歴史といっても、まだ20年足らずだが、フィリピン人講師の雇用などに貢献しており、大きな産業になっていると考えられる。

藤岡（2015, pp. 61–62）によると、セブにおける語学学校発展の歴史については、アジアの経済的危機により1997年に韓国が国際通貨基金の管理下に入ったことにより、国際競争力を高めるために英語学習熱が高まったため、雇用・言語条件等が合致したセブに韓国人経営者が目をつけ、語学学校を設立していったという。韓国では、英語産業界とネオリベラリズム言説が共犯関係にあり、英語スキルをグローバル人材の必須なスキルとみなし、官民団体が共同して、国民に対してフィリピンを含め英語留学を推進すると共に、英語教育産業によりネオリベラリズムの言説がより強固なものになっているという（Shin, 2016）。

このように強いネオリベラリズム言説に基づき、韓国がセブに語学学校を設立した歴史は韓国のグローバル企業の躍進とともにある。現在では、韓国の代表産業の一つとされる電子機器関連産業では、入社資格の一つとしてTOEIC900点を掲げている（高城, p. 54）。またTOEICのスピーキングテストも積極的に活用されており、各企業で基準点を定め、採用に活用している（TOEIC, 2011）。韓国人にとって、高い英語能力ひいてはTOEICの高得点を

取ることは就職に対して有利に働くというよりも、必須スキルとみなされ、そのスキル養成の地としてセブが適した場所であったということだろう。

この後、韓国経営の語学学校で学習者として学んだ日本人の中で、韓国の英語教育熱に刺激を受けると共に、日本人によりふさわしいカリキュラムや環境に基づいた語学学校を設立しようとした日本人が現れ、2010年以降日本人経営の語学学校が増加していったという。日本においてもグローバル人材の議論とネオリベリズム言説は2000年以降高まり（Kawai, 2009）、英語教育熱に対しては韓国社会と親和性が高かったことが考えられる。事実、藤岡（2015）によると、2002年には韓国人留学生は12万人おり、氏が学習者として経験した2005年当時、学習者の95%が韓国人であり、日本人は5%ほどであったというが、2014年時点では、日本と韓国の語学産業の市場規模は韓国の2800億円に比較して、日本は3300億円であり（藤岡, 2015）、日本の市場も拡大しているようである。フィリピンの語学学校入学の際には、学習特別許可を申請するが、その人数が、韓国は日本に比較すると約30倍であるというが、日本人学習者も増加しているという。

韓国と日本では教育方法は異なっている。特に、韓国人経営の語学学校はスパルタ式の教育を取り入れているが、日本式では、もう少し自由な環境であるという。スパルタ式の教育とは、フィリピン留学で定番の特徴の一つになっているが、授業自体が厳しいというよりは、学習に集中できるような環境作りがなされている。平日は外出禁止、または門限があり、学校によってはEOP(English Only Policy)を行っているほか、単語テストの実施、テストの成績を貼り出して学習者同士の競争を促す環境があるということである（毛利, 2015, p. 72）。

その他の特徴として、英語教育に熱心な韓国では、子供が幼い時は親が帯同して留学する親子留学、ジュニア留学が盛んであるという（中谷, 2016, pp. 48-50）。子供が中学・高校生くらいになると、英語キャンプに参加させる目的で、一人で渡航させるという（Shin, 2016）。一方、日本の留学は親（特

に母親)が留学したいので、それに合わせて子供を連れてくるケースが韓国と比較して多いと中谷は指摘している。このように、韓国ではすでに親子留学が一般的になっており、大学生になると欧米への留学が盛んになることから、逆説的に韓国語学学校の経営が傾き、日本人に経営を譲るということも現在はあるという。日本と比較して英語学習熱の高い韓国の事情をこの親子留学でも反映しているということである。

4. 課題と今後の展望

これまでセブ留学の特徴と発展の経緯について検討してきたが、本セッションでは、これまでの語学学校の特徴から見られた課題、とりわけ社会正義を目指したグローバル・コミュニケーションという観点からのセブ留学の課題について検討する。

社会正義とは、「ある社会に所属するすべての集団が平等に参加し、他者と主体と責任を発揮しながら、公平な資源の分配を行うプロセスであり目標」(Sorrells, 2013, p. 228)であると定義される。このことから、社会正義に基づくグローバル・コミュニケーションとは、「世界の様々な文化の差異をお互いに認め合い、文化間や人々の上下関係なく、一人ひとりが主体と責任を発揮しながら平等に参加するコミュニケーション」と捉えたい。特に、グローバル・コミュニケーションは世界の文化的価値の違いを乗り越えて相互に共存していく人間関係を目指すコスモポリタンの思想と親和性が高いと考えられる。膨大な思想であるため、むしろコスモポリタニズムに当てはまらないものを想定したほうがわかりやすく、この例として van Hooft (2009) は、「唯一のグローバル文化、言語、宗教の存在を探し求めること」「エキゾチックな商品、衣服、音楽などへの消費的な関心」「世界規模のアジェンダに対する西洋的自由主義や西洋道徳観の押しつけ」などはコスモポリタニズムではないと述べている。これらの特徴から判断すると、セブ留学及びそれをめ

ぐる言説には、以下の4点の課題があるように思われる。

まず1点目は、セブ留学の理由として、価格が安価ということが大々的に宣伝されているという事実は問題視すべきであると思われる。確かに欧米の留学と比較して価格は安価であることは事実ではあるが、安価であるという言説は、フィリピン人の教師の給料も安価で、安い労働力であるということをも意味し、留学を経済的視点のみから捉えている。賃金が欧米と比較すると低いこと自体は事実であり、批判の対象になり得ないかもしれないが、それが、フィリピン人は安い労働力であるというステレオタイプの言説が社会的構造を構築し、対人コミュニケーション場面においても、フィリピン人を格下に見下し、安く英語を教えてくれる商品として教師を認識してしまう傾向につながる可能性があるとするば問題である。自己との関係性から他者を重要な他者とし相互尊重をすることを重視せず、他者を単なる自分の目的を達成するための道具、商品とみなし他者化してしまうというブーバー(1979)が指摘したI-ThouではなくI-Itの関係性に陥らないような努力が必要となる。学習者側が本課題について意識的に取り組んでいくとともに、教師側も現在の社会構造を自明視することなく、学習者や社会との関係性を捉え直していく努力が必要であろう。

第2に、フィリピン留学は、欧米留学の代替物ないしは補完物として、またその前段階の準備として位置づけられる傾向があり、いわゆる欧米留学の下請けのような位置づけに当たる現状も課題といえよう。英語留学は欧米に行くのが当たり前であるという西洋一辺倒であった従前の流れに対して、英語を第2言語として使用するフィリピンというアジア圏、Kachru(1982)のWorld EnglishesのモデルのOuter Circleの国が注目を得た点は特筆すべきであるが、このままの従位的な地位が継続することによって、結局西欧中心主義ひいては英語を母語とする国々の優位性がさらに強固になってしまう可能性もあり、今後も注視していく必要があろう。欧米留学の補完、前段階の位置づけと言う言説は一般に流布しており、様々な場面で見られる。例えば、日

本でも高校の長期留学プログラムで、フィリピンに1か月程度英語学習を行ってから、その後ニュージーランド、オーストラリアに1年ほど留学するということが行われているようである。またこの傾向は韓国経営の語学学校に顕著で、フィリピンを踏み台として、英語能力が向上した後に欧米の国に留学することを奨励しているようである。

欧米留学の補完としての位置づけと関連して、フィリピン留学に適しているのは、英語学習者の初級・中級の学習者であるという言説もあり、実際にセブ留学は、英語学習初級者（中学校英語レベル）および中級者（TOEIC, IELTS の受験準備）向けであることを記しているガイドブックも存在する（安藤, 2016, p. 180; 高城, 2014, p. 96）。さらにビジネス英語については、フィリピン留学をしても、フィリピン人の講師がビジネス英語は教えられても、ビジネスの経験があるわけではないのでビジネス英語の学習にはならないという批判もあり（高城, 2013, p. 93）、結局は初級・中級者はフィリピンが適しているが、上級者になったら、欧米留学を目指すほうがよいという強力な言説を支持している。ここでもフィリピンは欧米の従位的な地位となっており、このような言説を切り崩していく努力が必要である。

結局このような言説は、西欧崇拜的な思考、ひいては英語を学ぶのであればネイティブスピーカーからのほうが良いとする「ネイティブ信仰」(Native Speakerism) (Houghton & Rivers, 2013) という関連した二重の精神的構造から解放されておらず、現実的にアメリカなどに様々な要因で留学できなかった者が、補完的にフィリピンに行くという現実をさらに強めてしまう危険性がある。欧米の代価物としてのフィリピンという位置づけをより強固なものとし、私たちの価値観によりそれが浸透してしまうことによって、フィリピンをそのカテゴリーとしての構造を付与してしまうことを筆者は懸念する。

このような状況が長く続くことによって、英語学習の名のもとにフィリピン人との不平等なコミュニケーションが助長されてしまうのを防止するために、今後どのような手立てが可能だろうか？まずは、そのような構造が当て

はまらないような社会制度づくり，日本人やフィリピン人に対する意識変革を今後継続的に行っていく必要がある。例えば，語学学校の主任教師に国際ビジネスの経験のある者を採用し，実際に国際ビジネス場面に基づく英語教育を行うほか，西欧留学の準備のための授業だけでなく，アカデミック・コンテンツを重視するなどし，西欧の代価物としてのフィリピンという強力な言説を打破する不断の努力が必要であろう。

ここでの指摘は，フィリピンのこれまでの初級・中級学習者向けの教育を廃止すべきと述べているのではない。初級・中級者のみがふさわしいとする言説に対しての懸念を表明しているのであって，以前から語られている初級・中級向けの効果的な授業は今後も継続すべきではある。初級・中級学習者に対しては，確かにマンツーマン授業はふさわしく，より安心した環境で勉学に励むことができるというメリットにはなる。英語初級者に対しては，フィリピンでは，1960年代のオーディオ・リンガリズムに歴史をたどることのできる口頭反復法のカラン・メソッドが使用されているのもその表れであり，効果も報告されている（カラン・メソッドについては，坂本（2013）に詳しい）。初・中級向けのプログラムと同様，様々なレベルが行われ，より一層の英語教育の拡充，プログラムの充実が望まれる。

上記に述べた多様な英語教育により西欧中心主義からの脱却を促すことと関連して，第3の課題として，英語学習のみを中心とした視点から，文化・社会・歴史など人文科学・社会科学的視点からの教育を行うといった，フィリピン滞在を生かすことを目的とした英語教育プログラムの創造が必要であろう。これまでのフィリピンの語学学校での授業では，英語習熟度を高めるためのスキルを中心としたものであり，授業内容として文化・社会について教育することはあまり注目されていない。少なからず，通常の授業やマンツーマン授業において，間接的に文化，社会，歴史，時事問題などを学ぶことがあるはずだが，通常の授業の補完として扱われる程度であると思われる。しかし，昨今の大学英語教育においては，内容言語統合型学習（Content and

Language Integrated Learning, CLIL) が盛んに実践され、英語スキルの伸長と共にアカデミックな内容を扱うことも積極的に行われている (Coyle, Hood, & March, 2010; Ruiz de Zarobe & Jiménez Catalán, 2009)。特に大学生ともなれば、政治・社会・環境などの時事問題に関心もあり、日本社会との異同をトピックとしながらフィリピン人教師を文化インフォーマントとして社会比較を通して学習できる格好の機会となる。むしろ、そのような内容を教材に入れていくことによって、前述した西欧中心の英語教育観を打破することにもつながる可能性がある。

フィリピンの文化、社会について英語教育を通して理解を深めるには、セブ語、タガログ語の現地の言葉についてある程度学習することもフィリピン人とのコミュニケーションにおいては利点にもなるだろう。語学学校だから、英語力養成に注力すべきことは当然であろうが、むしろ付加価値としての文化学習、文化交流的な視点を導入することによって、社会的正義を目指したコミュニケーションを行うことができるようになるだろう。

第4の課題としては、日本人にあった英語教育が促進されればされるほど、日本的な基準が現地にも採用され、異文化理解を促進するうえで懸念材料となることである。これは、フィリピン人とのコミュニケーションだけでなく、フィリピンに学びに来る外国人に対する理解にも関連する。特に欧米留学の際には、当たり前で現地の文化・社会に対する学習や外国人との多文化交流が前提とされているのにもかかわらず、フィリピン留学の場合は、初期値としてこの点があり想定されていない。むしろ衛生環境や衣食住環境の点から日本の環境とあまり変化しないように配慮がなされ、英語学習のみに集中できる環境づくりが良しとされる点について、日本人学習者側もそのほうが快適だからという理由で深く考えることなく受け入れている傾向が強い。そうではなく、異文化の環境を日本と比較し、自身のあり方を内省する機会としてとらえたい。

日本の基準に合わせる傾向は日本人経営の語学学校が増加している現在、

むしろ強まっているのではないかと推測される。太田（2015, p. 43）によると、2010年当時のフィリピン留学では、韓国人との学生同士のやり取りが多いことも魅力の一つとして挙げられており、寮では多国籍の学生と一緒に、英語学習だけでなく異文化理解の実践の場となっていたと指摘している。しかし、現在日本資本の語学学校も増え、日本人学習者の英語効率を高めるために日本語の文法参考書を使用するなど、より日本人英語学習者に適切な教育を行う学校も設立されていることから、国別による語学学校の選択が行われている傾向が強くなっていると思われる。英語学習によって多様な人々とのコミュニケーション能力を高めようとしているにもかかわらず、結局日本的な発想、価値観から脱することのない日本的な場をセブという外国に築いているのは、なんとも皮肉である。英語能力は伸長しても、異文化コミュニケーション能力とされる異文化に対する態度、知識、スキル、気づき、思考（Byram, 1997, p. 73）は身につかないどころか、それを妨げるような思考に陥ってしまう可能性すらある。慣れ親しんだ環境ではない文脈での体験を通して、異文化に対する寛容性、積極性など多様性を受容する価値観の涵養も重要な視点ではないかと考えられる。

これまでの4つの課題を考察することを通して、フィリピン留学は従来の西欧中心主義、「ネイティブ信仰」を打開できる新たな可能性を秘めた場であるとともに、結局は従来の歪んだ社会構造の中に取り込まれているに過ぎない状況であるという両面を明らかにした。社会正義を志向したグローバル・コミュニケーションの視点からは、フィリピン留学がより相互の文化理解を促進するとともに、グローバル・シティズンシップを育成できる場に変容していくことが強く望まれる。

5. まとめ

本稿では、英語学習者の留学先として近年注目を浴びているフィリピン留

学，特にセブ留学を中心に，その特長，語学学校設立の歴史を概観し，その後社会正義を志向したグローバル・コミュニケーションの視点からの課題を検討した。セブ留学は欧米への留学に対して，文化多様性を認める新たな可能性を示唆する空間になり得るが，現状としては欧米留学の代替・補完先としての位置づけが強いことを明らかにした。日本人学習者だけでなく，語学学校経営者，フィリピン人教師，産業界，研究者など様々な人々が社会正義やグローバル・コミュニケーションのあり方に関心を向けることによって，新たな社会の構築を志向していくことが重要であろう。

運輸，科学，情報技術の発達により，人の移動は以前と比較して格段に容易になり，例えばフィリピンへは4時間程度で移動できる。一方，オンライン授業も行われて，日本の日常の生活を営みながら，全く移動することなく家庭のコンピュータからインターネットを通じてフィリピン人教師からオンライン英語授業を受けている人々も多く存在する。教師はフィリピン人とは限らず，世界各地の英語話者という場合もある。このようにグローバルな人間関係を構築しやすくなった現在，英語学習やコミュニケーションの仕方の変化とともに，異なった言語や文化背景の人々とどのようなコミュニケーションや関係構築をしていくのか，個人や社会の問題としても問われている。フィリピン留学はこのような問題を顕在化する格好の機会である。

参考文献

- 安藤美冬 (2016) 『ビジネスパーソンのためのセブ英語留学』 東洋経済新報社
ブーバー，マルティン (1979) 『我と汝・対話』 岩波文庫
Byram, M. (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Multilingual Matters.
Coyle, D., Hood, P., & March, D. (2010). *Content and language integrated learning*. London: Cambridge University Press.
Davies, P., & Pearce, E. (2000). *Success in English teaching*. Oxford, UK: Oxford University Press.
フィリピン政府観光省 (2011) フィリピン英語留学意識調査。

- <https://mottotanoshiphilippines.com/news/news20110622.pdf>
- Houghton, S. A., & Rivers, D. J. (2013). *Native-speakerism in Japan: Intergroup dynamics in foreign language education*. Bristol: Multilingual Matters.
- 福屋利信 (2015) 『グローバル・イングリッシュならフィリピンで セブ・シティから世界をつかめ!』近代文藝社
- Kawai, Y. (2009). Neoliberalism, nationalism, and intercultural communication: A critical analysis of a Japan's neoliberal nationalism discourse under globalization. *Journal of International and Intercultural Communication*, 2, 16–43.
- 一般社団法人海外留学協議会 (2018) 一般社団法人海外留学協議会 (JAOS) による日本人留学生数調査 2018. <https://www.jaos.or.jp/newsrelease#dd01>
- 山英男・藤岡頼光 (2015) 『これからの英語教育 フィリピン発・英語学習法』中村堂
- 毛利豪 (2015) 『フィリピン・セブ留学で英語を最短で学ぶ方法』セルバ出版
- 中谷よしふみ (2016) 『英語は「フィリピン」で学べ! 短期集中・マンツーマン・格安の語学留学』プチ・レトル
- 太田英基 (2015) 『フィリピン「超」格安英語留学』東洋経済新報社
- 太田裕二 (2016) 『セブ島英語留学完全ガイド』幻冬舎
- 坂本美枝 (2013) 『カラン・メソッド「英語反射力」を鍛える奇跡の学習法』東洋経済新報社
- Seoane, E., & Suarez-Gomez, C. (2016). *World Englishes: New theoretical and methodological considerations*. Amsterdam: John Benjamin Publishing Company.
- Shin, H. (2016). Language ‘skills’ and the neoliberal English education industry. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 37, 509–522.
- Sorrells, K. (2013). *Intercultural communication: Globalization and social justice*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- 高城剛 (2013) 『21 世紀の英会話』マガジンハウス
- TOEIC (2011). *TOEIC newsletter digest No. 109*. Retrived from http://www.iibc-global.org/library/redirect_only/library/toEIC_data/toEIC_en/pdf/newsletter/newsletterdigest109.pdf
- Ruiz de Zarobe, Y. & Jiménez Catalán, R. M. (Eds.) (2009). *Content and language integrated learning: Evidence from research in Europe*. Bristol: Multilingual Matters.
- van Hooft, S. (2009). *Cosmopolitanism: A philosophy for global ethics*. Montreal & Kingston: McGill-Queen's University Press.